



風景の句読点

Punctuation of Scene 第11回

ショパンの幻想即興曲を弾く娘と見守る母

株式会社千代田コンサルタント/社会環境事業部&事業推進本部/海外業務室
児島 正之 KOJIMA Masayuki (会誌編集専門委員)

ピアノのある風景

(広島市紙屋町)

私の郷里、広島市内の地下街にたたずむNHKでおなじみの街角ピアノ、ピアノを愛する者にとって、思わず立ち止まりたくなる風景との出会いだ。

そのピアノは2020年7月8日、広島市中心部の中区紙屋町にある「紙屋町シャレオ」東通りに置かれた。長年「純音楽茶房ムシカ」で使われ、人々に愛されてきた1967年製のグランドピアノである。今は、花のイラストがピアノ一面に描かれ「花と緑と音楽があふれるまち・広島」のイメージを現した、誰でも自由に演奏ができるストリートピアノだ。見るだけでも楽しい。

「純音楽茶房ムシカ」は、1946年8月に原爆投下により焼け野原となった広島駅近くに開店し、数度の移転を経て、

「風景の句読点」は、私たちの心に句読点を打ち、思わず足を止めたいくなるような素晴らしい風景について、その成り立ちや魅力の源泉を紹介するコーナーです。



花のイラストが一面に描かれたピアノ

2020年3月末に閉店した。ピアノは1983年までムシカで使用された後、教会に寄附されている。その後、調律師の手を経て、広島市に寄附された。

紙屋町シャレオによると、2021年度は一日平均約40人が、早朝は6時台から深夜は23時台まで、このピアノを弾いたという。いつも演奏に巡り合うわけではないが、この場に立つといつもワクワクする。

ショパンの幻想即興曲を弾く娘と優しい眼差しで見守る母、バッグを背負ったまま一人夢中で宇宙戦艦ヤマトを奏でる中年男性。奏者の表情や背中、指先、曲調から伝わってくるものがある。

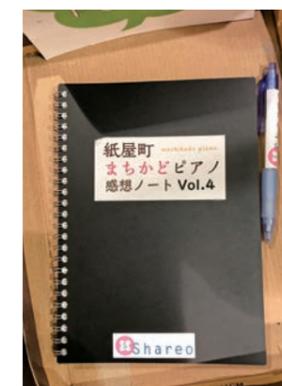
ピアノの後ろのテーブルには「紙屋町ピアノ感想ノート」が置かれている。そこには奏者や来訪者の思いがこぼれ、ピアノや場の魅力について書かれている。

広島は、昔はほとんどが海で市内の比治山や黄金山は島であった。毛利輝元が1589年から太田川河口デルタの最も

広い島に築城を始め、「広島」と命名したと言われている。デルタ地帯であったことから工事は難航し、洪水との戦いであった。干拓と治水は、この後400年にわたって繰り返され、現在の広島市が形成されている。

1994年には広島高速交通株式会社が運営する新交通システム「広島高速交通広島新交通1号線」、通称「アストラムライン」が開通した。地下化に合わせて地下街が計画され、2001年には軌道上部に広島市初の地下街「紙屋町シャレオ」がオープンした。アパレルや雑貨、スイーツ店などがあり、市の中心部を結ぶ地下通路としても利用されている。地下通路は道路法上の道路にあたるため、ピアノの常設は関係者の多大なる熱意の賜物とのことだ。

ピアノのある風景は、日本各地、世界各地で人々の足を止め、今もやすらぎと、ほほ笑みを生み出している。街でピアノを見かけたら、立ち止まって奏者の心に寄り添ってみてはどうだろうか。



紙屋町まちかどピアノ感想ノート

<参考資料>

- 1) 「紙屋町まちかどピアノ」広島市ホームページ (<https://www.city.hiroshima.lg.jp/site/nakaku/159251.html>)
- 2) 「紙屋町シャレオ」ホームページ (https://www.shareo.net/machikado_piano/)
- 3) 「太田川放水路のあゆみ」国土交通省中国地方整備局太田川河川事務所ホームページ (<https://www.cgr.mlit.go.jp/oitagawa/oitagawahousuiro/pdf/20180207oitagawahousuironoayumi.pdf>)

写真は筆者